京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 2 年目）

1. 研究課題

仏教天文学説の起源と変容

Origins and Transformations of Buddhist Astronomical Doctrines

2. 研究代表者氏名

小林博行

KOBAYASHI Hiroyuki

3. 研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

本研究は，仏教経典に見られる広い意味での天文学にかかわる諸説を検討し，その多様な起源と変容を明らかにする。仏教経典の中には，宇宙の構造，太陽と月の運行，暦法，占星術などについての諸説を掲載するものがある。これらはもともと成立時期も背景もさまざまであったが，さらにインドから中国へ，そして朝鮮，日本へと伝わる過程で各地の文化や社会に適応しつつ，大きく変容していった。

その具体的プロセスを明らかにするために，本研究ではとくに 19 世紀日本で提唱された「梵暦」に着目し，そこに取り上げられた諸学説の起源と変容の解明を試みる。「梵暦」の推進者たちは，多くの経典から関連諸説を集めて，須弥山を中心とする仏教的世界像の再構築を目指した。それら関連諸説の相違や重複に注目しつつ，その由来を検討することで，長期間にわたる広範な文化伝播現象をとらえ，さらには「梵暦」自身を批判的に乗り越えることを目指す。

In this research, we examine astronomical doctrines found in Buddhist sutras in order to elucidate their multiple origins and transformations. Some Buddhist sutras are known to contain various theories concerning cosmic structure, solar and lunar motions, calendar systems, astrology, etc. Originally formulated in different times and circumstances, these teachings underwent substantial transformations, adapting to local cultures and societies in the process of diffusion from India to China, then to Korea and Japan.

To trace their actual processes, we focus on the ""Bonreki"", a Buddhist astronomical campaign advocated in 19th century Japan, and attempt to shed light on origins and transformations of doctrines exploited thereby. ""Bonreki"" proponents garnered information from many sutras to reconstruct the Buddhist universe with Mount Sumeru at its center. By

examining the provenance of doctrines while paying due attention to their discrepancies and redundancies, we aim to gain an understanding of a long and broad-ranging series of cultural transmissions and to critically surpass the ""Bonreki"" itself.

5. 本年度の研究実施状況

今年度も感染症流行のため研究計画の変更を余儀なくされ、共同研究会はおおむねオンラインで実施することになった。そうした変更はあったものの、最終的には計 18 回の研究会を重ね、当初の目標であった『宿曜経』会読は全編の通読と問題意識の共有を完了し、『仏国暦象編』については巻 3 の途中まで訳稿検討を進め、また訳注出版に向けた編集作業を開始した。また 4 月にはこれまでほとんど注目されてこなかった『宿曜経』版木にまつわる報告を得、9 月には隣接領域の科研プロジェクトとの共催で国際シンポジウムを実施するなど、今後の研究発展のために有意義かつ重要な成果を得た。また 3 月には、班員らで企画・編集・寄稿した、日本科学史学会欧文誌 Historia scientiarum の東アジア科学史特集号を刊行することができた。また、今後の編集・検討作業に必要な『梵蒂岡圖書館藏明清中西文化交流史文獻叢刊・第 2 輯』などの文献を研究班予算で購入した。

6. 本年度の研究実施内容

2022-04-23 研究報告会 江戸期高野版の板木―『宿曜経』（享保 21 年序）を中心に 発表者 金子貴昭 立命館大学 『仏国暦象編』訳注作成の経緯と展望 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所

2022-05-23 『宿曜経』会読 下巻 14b10 行動禁閇法～16b03 発表者 髙橋あやの 関西大学

2022-06-27 『宿曜経』会読 巻下 16b04 二十七宿三九秘要法～19a07 発表者 清水浩子 大正大学

2022-07-10 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 2.30b06-32a10 発表者 梅林誠爾 熊本県立大学 巻 2,32b01-34a04 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所

2022-07-25 『宿曜経』会読 下巻 19a08 七曜直日暦～20b06 発表者 白雲飛 大阪府立大学

2022-09-11 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 2.34a05-36b08 発表者 小林博行 中部大学 巻 2.36b09-37b03＋38b 挿図 発表者 平岡隆二

2022-09-18 Magic in the Medieval and Early Modern Islamicate World and Europe（中近世のイスラム圏とヨーロッパの魔術知）Ps.-Aristotelian Hermetica 発表者 Liana Saif アムステルダム大学 Magic and Kalām Theology in the 14th and 15th Centuries 発表者 Yuki Nakanishi 大阪大学 Paracelsian Concept of the Homunculus 発表者 Amadeo Murase 聖学院大学

2022-09-26 『宿曜経』会読 下巻 20b07 七曜占～24a05 発表者 三村太郎 東京大学

2022-10-09 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 2.37b03-39b02 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所 巻 2.39b03～41b07 発表者 平岡隆二
2022-10-24 『宿曜経』会読 下巻 20b07 七曜占～24a05（継続） 発表者 三村太郎 東京大学 史料紹介 発表者 宮紀子 下巻 24a06 七曜直日与二十七宿合吉凶日暦～26a06[本文大尾] 発表者 宮紀子
2022-11-14 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 2.41b08-43b09(巻 2 末) 発表者 小林博行 中部大学 巻 3.01a01-02a06 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所
2022-11-28 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.02a07-06b01 発表者 平岡隆二
2022-12-12 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.06b01～07b05 発表者 平岡隆二
2022-12-26 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.07b05-09a06 発表者 小林博行 中部大学 巻 3.09a07-10b10 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所
2023-01-23 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.10b10～12b08 発表者 平岡隆二 巻 3.12b08-14a06 発表者 小林博行 中部大学
2023-02-13 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.12a08-18b03 発表者 小林博行 中部大学 巻 3.18b04-20a08 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所
2023-02-27 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.20a08-22a05 発表者 宮島一彦 中之島科学研究所 巻 3.22a06～23b10 発表者 平岡隆二
2023-03-13 『仏国暦象編』訳稿検討 巻 3.22a06～23b10 発表者 平岡隆二 巻 3.24a01-26a07 発表者 小林博行 中部大学

7. 共同研究会に関連した公表実績
国際ワークショップ「Magic in the Medieval and Early Modern Islamicate World and Europe (中近世のイスラム圏とヨーロッパの魔術知)」
日時・場所：2022 年 9 月 18 日（日)、京大人文研本館大会議室
主催：科研基盤 B「中世・近世イスラム圏と西欧における魔術的知の交流史」(代表：村瀬天出夫）および本研究班

Ryuji Hiraoka ed. Special Issue: East-West Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2, Historia scientiarum vol. 32-2, 2023, pp. 59–156.

8. 研究班員
所内
平岡隆二、高井たかね、宮紀子、武田時昌
学内
檜山智美(白眉センター)
学外

小林博行(中部大学人文学部)、三村太郎(東京大学大学院・総合文化研究科)、豊田裕章(大阪大学)、多田伊織(大阪大学)、白雲飛(大阪府立大学)、梅林誠爾(熊本県立大学)、高橋あやの(関西大学)、橋本敬造(関西大学)、矢野道雄(京都産業大学)、清水浩子(大正大学)、梅田千尋(京都女子大学文学部)、吉村美香(愛知淑徳大学)、新居洋子(大東文化大学)、金子貴昭(京都先端科学大学)、岡田正彦(天理大学)、Bill Mak(ニーダム研究所)、Jeffrey Kotyk(ブリティッシュコロンビア大学)、Daniel Monteiro(パリ大学)、マティアス・ハイエク(フランス国立高等研究実習院)、宮島一彦(中之島科学研究所)、吉田薫(独立研究者)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属		4					47				
（内女性）		(2)					(30)				
京大内（人文研を除く）		1		1			5		5		
（内女性）		(1)		(1)			(5)		(5)		
国立大学		3					24				
（内女性）		(1)					(15)				
公立大学		2					39				
（内女性）		(1)					(21)				
私立大学		10					91				
（内女性）		(5)					(44)				
大学共同利用機関法人											
（内女性）											
独立行政法人等公的研究機関											
（内女性）											
民間機関											
（内女性）											
外国機関		4	4	1	1	1	6	4	1	1	1
（内女性）		(1)	(0)	(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(1)	(0)	(0)
その他 ※		2					18				
（内女性）		(1)					(14)				
計	0	26	4	2	1	1	230	4	6	1	1
		(12)	(0)	(2)	(0)	(0)	(130)	(0)	(6)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要	中之島科学研究所、独立研究者										

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	3		2	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	6		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	1		1	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名（必須）	掲載論文数（必須）	掲載年月日（必須）	論文名（必須）	発表者名（必須）
1	Historia Scientiarum	1	R5.3	Retrieving the Golden Needle, or Removing It? A Mathematical Correspondence in Mid-Sixteenth Century China	Hiroyuki Kobayashi
2	論点・日本史学	1	R4.8	キリシタンと科学伝来－宣教師はなぜ西洋科学を紹介し、どのように受容されたのか	平岡隆二
3	Historia Scientiarum	1	R5.3	The Discovery and Significance of Sufera no nukigaki (Selection on the Sphere), a Jesuit Cosmology Textbook in Japanese Translation	Ryuji Hiraoka
4	Special Issue: East-West	4	R5.3	*編集	Ryuji Hiraoka ed.

	Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2 (Historia scientiarum 32-2)				
5	アート・リサーチ	1	R4.12	立命館大学アート・リサーチセンターの板木コレクション	金子貴昭
6	平山郁夫シルクロード美術館紀要	1	R5.2	平山郁夫シルクロード美術館所蔵の三点のキジル石窟壁画片について―原位置と図像内容の分析―	檜山智美
7	敦煌研究	13	R4.8	敦煌莫高窟第 285 窟西壁壁画中的星宿图像与石窟整体的构想	檜山智美（著）蔺君茹（訳）
8	Connecting the Art, Literature, and Religion of South and Central Asia: Studies in Honour of Monika Zin	37	R4.5	*共編	Ines Konczak-Nagel, Satomi Hiyama, Astrid Klein ed.
9	醫譚	2	R4.6/R4.12	大谷大学ヘルンレ文庫目録（２）/(最終)	多田伊織(ほか)
10	日本暦学会	1	R4.4	堺・正覚寺須弥山碑と橘堂流情の須弥山儀について	吉田薫

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

感染症の流行により、予定していた旅費の執行が難しくなったため、当初予算 75 万円のうち 30 万円を返還し、また残りを訳注作成に必要な関連文献（『梵蒂岡圖書館藏明清中西文化交流史文獻叢刊・第 2 輯』など）の購入に充てた。それらは今後の共同研究会での訳稿検討とその編集や、各班員の個人研究に活用する予定である。

14. 次年度の研究実施計画

最終年度となる次年度は、１）『仏国暦象編』の訳稿検討と編集、２）公開セミナー「仏教天文学と文化交流」の開催、の二つを中心に研究を進めてゆく。１）については、引き続き共同研究会を定期的に開催し、班員らによる訳稿作成とその内容にまつわる検討・討議を行う。またそれと並行して、検討の終わった訳稿の編集作業を進め、将来の刊行に向けた準備を着実に進めてゆく。２）は人文研アカデミーのイベントとして 12 月 3 日（日）に実施を予定しているものである。各班員がそれぞれの研究成果を持ち寄って報告・討議することで、梵暦運動の発展の諸相を多角的に分析・解明することを目指す。またそれを市民向け公開セミナーとして実施することで、本研究班の活動と成果を広く社会に還元する。そのほか、研究会での各班員の個別報告や討議を通じて、本共同研究班の成果の総括と、さらなる将来の発展に向けた方向性を探る。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	18		520000
	一般旅費			50000
海外旅費	渡航旅費			100000
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				50000
消耗品等経費				10000
その他				20000
合計				750000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

上記１）『仏国暦象編』の訳稿検討と編集を、定期的かつ着実に進めてゆく。全５巻の検討と編集を終えるにはまだ相応の時間を要するが、次年度内に前半部分（巻一～三、可能であれば四まで）は編集まで完了させ、２０２４年度以降に刊行するための準備を整える。それ

と並行して、研究期間内に後半部分の訳稿についても、可能な限り検討・編集を進めたいと考えている。その過程で得られた成果は、２）公開セミナーなどの機会や、班員による個別の発表・論文等を通じて、随時公開してゆく予定である。